

第2節 難波宮跡北西部出土の絵馬

江浦 洋

1. 序

今回の調査では、谷を部分的に調査しただけで、30点を超える絵馬が出土した。

全国での出土点数が50点前後であることを考えると、今回の出土点数は群を抜いて多く、しかも同一層位からまとまって出土したことにより、空間軸・時間軸を一とする絵馬群と捉えることが可能であり、相互の比較検討を行う上において格好の条件を備えている。また、調査地は難波宮跡の北西部にあたり、難波宮をめぐる祭祀の実態を考える上においてもきわめて重要な位置を占めるものといえる。究極には難波宮跡における絵馬祭祀などの巨視的な検討が必要であるが、本稿ではあえて数点の絵馬にこだわり、絵画意匠が共通する向かい合う絵馬を抽出して検討を加えることにしたい。

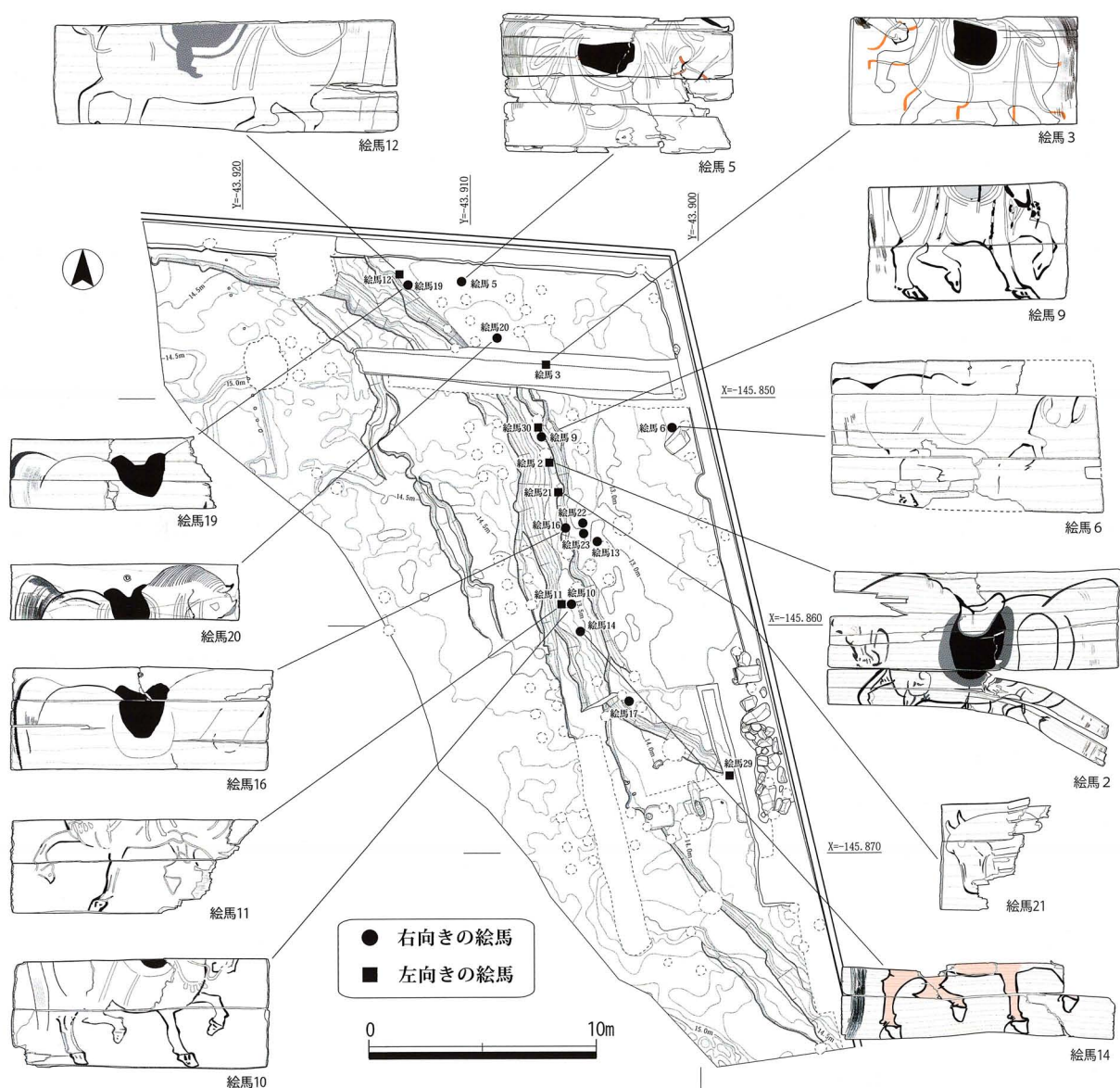


図 318 谷2における絵馬の出土分布

2. 難波宮跡出土絵馬概観

今回の調査では、谷1の11層から2点、谷2の11層から31点、合計33点の絵馬が出土した。

このほか、絵画は残らないものの、法量や成形などから絵馬である可能性が高い板材が4点出土している。

いずれも谷の堆積土中からの出土ではあるが、西側斜面の法尻からまとまって出土している（図318）。また、同層からは奈良時代後半の土器が出土し、絵馬の年輪年代測定結果とも符合する¹⁾。

出土した絵馬の多くは完全な形を残さないが、脚部や鞍などの特徴的な絵画が残ることから、絵馬と判断できるものが多い。多くは断片ではあるが、接合作業や固体識別を経た数が、冒頭で記述した個体数である。

多くの絵馬は木取りの関係もあり、横方向に短冊形に割れているものが多い。したがって、高さ不詳のものが大勢を占めるが、幅に関しては旧状を残すものが多い。幅は完存するものでは、絵馬9が最小で17.54～17.57 cm、絵馬12が最大で30.16 cmであるが、多くは20～24 cmの範囲におさまる。

最大の絵馬12の幅が1尺に近い値を示し、一方で最も小さい絵馬31が5寸であることを考えると、これらの絵馬の大きさは適当に作られたのではなく、大きさに関しても一定の規範に基づき、しかも尺度を用いて行われていたことを示唆している（図319）。ここでは詳しくは触れないが、出土した多くの絵馬は7寸5分前後に集中する傾向をみせ、この傾向は今回の調査で出土した絵馬にとどまるものではなく、他遺跡から出土した絵馬とも共通するものである。

また、上端部の中央に穿孔をもつものが6点確認できるが、上端部が残存していても穿孔しないものもある。このうち、絵馬1や絵馬20などは工具を用いて円形の穿孔を行うものであるが、絵馬2や絵馬6などは釘などを打ち込んだために生じたものと考えられるものである。

描かれた馬は基本的には鞍などを装着した飾り馬であり、胸繫や尻繫、障泥や鐙などを表現するものもある。いずれも手馴れた筆致で描かれており、多くは輪郭線を墨で描くが、かならずしも一様ではない。

馬の方向は、確認できるものでは、右向きと左向きが14点ずつであり、牝牡の区別が表現されるものもある。頭部の向きを別とすれば、基本的な全体構図は右向きの場合は左前肢と左後肢を上げ、左向きの場合は右前肢と右後肢を上げる「側体歩」（ペーサー）の歩様で共通し²⁾、頭部は顎を引いた構図をとる。

ただ、細かく見ると、その筆致から絵馬のすべてが同一の絵師の手によるものではないことは明らかである。馬の描き方には複数のパターンがあり、筋肉の細部に至るまでを墨画で表現するものや体部に赤色顔料を塗布するものもある。また、彩色が残らないものでも、体部のみが白っぽくなっているものもあり、これらについては彩色されていた可能性が高いものと判断している。また、一部の絵馬では手綱等を赤色顔料を用いて描かれていたことも看取できる。

いずれにしても、これまでの調査で古代

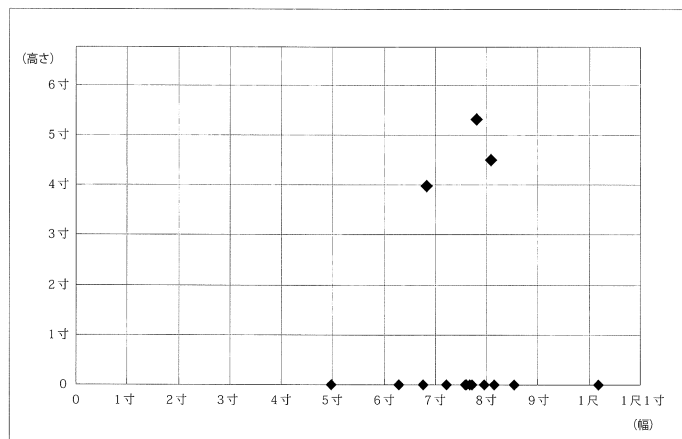


図319 出土絵馬の法量分布

にまで遡る絵馬は全国で 50 点弱が確認されているが、一遺跡からの出土数でいうと、伊場遺跡から 9 点が出土していたのが最多であった。

今回の場合、一遺跡というよりも一地点から 30 点を超える絵馬が出土したという点で群を抜く。しかも、難波宮跡北西部の一地点からの出土という点で、空間軸・時間軸を一にする絵馬群であり、相互の比較検討はもとより、向後の絵馬研究上の基準資料として重要な位置を占めるものといえる。

今回の調査で出土した絵馬のうち、絵画が確認できるものでは顔の方向を右向きにしたものと左向きにしたものが、14 点ずつで同数を数える。わずか 30 点あまりという出土点数であり、統計学的に言えば偶然の所産ともいえずもないが、期せずして両者の数が一致することは非常に示唆的である。これは以下の検討を通して意味のあるものであると考えている。

3. 難波宮跡出土絵馬細見

出土した絵馬の整理作業の過程で、絵画や板材の木取りなど、意匠を同じくする絵馬の存在が明らかとなり、しかもそれらが右向き、左向きで、セット関係であった可能性も浮上しつつある。

以下、第 5 章での報告と重複する部分もあり、やや冗長となるが、意匠を同じくする数点の絵馬を詳しくみていくことにしたい。

(1) 絵馬 3 と絵馬 5

絵馬 3 谷 2 の 11c 層から出土した。上下両端を欠失するが、表面を下方に向けて出土したこともあり、残存部分の状態は比較的良好である。

絵画は表面のみで、左向きの馬を描いている。右前肢を大きく上げ、胸前と臀端が丸く、さらに細線によって臀端に沿う長い尻尾が描かれるなど、特徴的な意匠である。陰筒の表現はなく、これを積極的に評価するならば、牝馬の可能性が高いことになる。墨による線描は鼻端とマエガミ、障泥部分のみである。これらの墨描き部分はきわめて明瞭であり、他の部分については経年変化で霧消したのではなく、もとより輪郭のすべてを墨描きしていなかったものと判断できる。この絵馬は図 320 右上の赤外線画像、赤外画像の階調を反転した画像をみてもわかるように、暗色化した木地の中に絵画が白く浮き出し

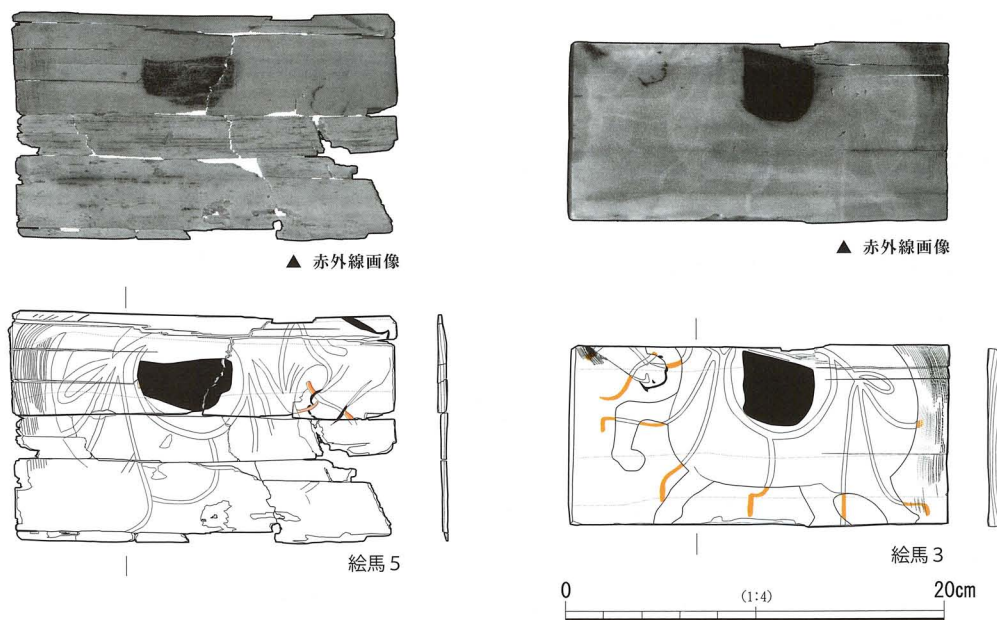


図 320 絵馬 3 と絵馬 5

ており、さらには紐の部分には赤色顔料が残っている。胸繫や尻繫、手綱や面繫のほか、障泥なども表現されるが、尻繫を除いて、紐の先端は胴部に巻き込むことなく、下方に垂れ下がっている。

体部に塗布した顔料は残らないが、木地の明暗ではっきりと輪郭線が追えることなどを勘案すると、体部全体を着色していたと考えられる。また、紐の部分は体部の内側では赤色顔料が残らないのに対して、体部の外側では例外なく赤色顔料が残っている。これは、体部に着色した後に紐を赤色顔料で描いたため、体部内側の赤色顔料は体部の着色部の剥落とともに消滅した可能性がある。

当該絵馬は、今回の調査で出土した絵馬の中でも、ひととき特徴的な意匠をもつものであり、板材の加工も非常に丁寧である。他の出土絵馬と照らし合わせると、板材の加工や絵画の意匠にいたるまで、後述する絵馬5と共通する点が多い。

ちなみに、絵馬3と絵馬5の出土地点の平面距離は約5mであり、谷の埋土とはいえ、出土地点もさほど離れていないことは留意してよいものと判断する。

絵馬5 谷2の11c層から出土した。上半部と下半部が二分した状態で出土し、表面を下に向けて出土した上半部の残りは良好であるのに対して、絵画の描かれた表面を上に向けて出土した下半部の残りは悪く、対照的である。全体を通して短冊形に細かく割れているが、馬が描かれた表面は上半部の残存状況は比較的良好であることから、馬の姿を追うことが可能となっている。

表面にのみ絵画があり、下半は不明瞭ながらも、板材いっばいに右向きの馬を描いていることが看取できる。馬の背中や臀部の上方は板材の上端からはみ出している。墨による線描が残るのは、頭部と顔の先端部、障泥部分にのみである。これらの墨描き部分はきわめて明瞭に残り、状況からみて他の部分の墨が経年で霧消したとは考えがたく、当該絵馬では、元来、輪郭のすべてを墨で線描していなかったものと判断する。

この絵馬も他例と同様に暗色化した木地に比して、絵画部分が白く浮き出し、これを追うことによって図320左に掲げたように顎を引いた馬の姿が看取できる。下半は不明瞭で牝牡は不明である。

鞍の位置は墨が置かれていないのに対して、その下部の障泥と考えられる部分は真っ黒に塗りつぶされている。体部には尻繫、胸繫を構成する紐が表現され、顔面には面繫も描かれる。口の部分の紐の線描部分には赤色顔料が明瞭に残る。

体部に塗布した顔料は残らないが、木地の明暗ではっきりと輪郭が追えることや墨による輪郭線が全周しないことなどを勘案すると、当該絵馬も体部全体を着色していた可能性が高いものと判断する。

絵馬3の項でも記したように、当該絵馬の絵画意匠は頸のラインや胸繫や尻繫、さらには障泥や尻尾の描き方に至るまで、多くの点で絵馬3と共通する。板材の加工に関しても両サイドを整正に丁寧に切断する板目材を用いる点や、両者の幅が近似することなどから、両者はシンメトリーに馬を描いたセットであったものと判断できる。

(2) 絵馬10と絵馬11

絵馬10 谷2の西側法面下部の11c層から出土した。絵馬11と近接して出土しており、その距離はわずか約20cmを測るのみである。上部を欠失し、2片に割れている。割れはいずれも古い段階のものであるが、人為的なものか否かは不明である。状況から見て、全体がほぼ均等に3片に割れ、上部の破片が逸失していることがわかる。

表面にのみ絵画があり、板材の下端に右の前後肢を着けて、右向きの馬を描いている。股間部分は不明瞭ながら、陰筒の表現は視認できない。他の絵馬と同様に左の前後肢を上げる「側体歩」の歩様に顎

を引いた構図である。輪郭線の大半は墨によって線描されているが、右後肢では輪郭線の外側に木地の明暗差による輪郭線が視認できる。他例との対比から、当該絵馬に関しても体部に顔料を塗布していた可能性が高い。

上部は欠失しているが、上端部には半月形に墨で塗りつぶされた箇所があり、その周縁部にもわずかに墨が残っている。位置的にみて鞍もしくは障泥であると考えられる。これ以外は全体に不明瞭であるが、手綱のほか、胸繫および尻繫などの紐の痕跡がわずかに白く浮き出している。

きわめて不明瞭ながらも胸には何らかの飾りが下がっていた状況も看取される。これらの部分には墨痕はまったく残らず、他の顔料を用いて線描していた可能性が高い。

上記のように、当該絵馬には胸繫に装飾がある点を特徴とするが、このような胸繫は後述する絵馬 11 でも確認でき、出土位置が接近していることとあわせて近親性の高い絵馬であると考えられる。絵馬 3 と絵馬 5 の関係と同様に顔の向きが左右の逆位であることも留意される点である。

絵馬 11 谷 2 の西側法面下部の 11c 層から出土した。絵馬 10 の東約 20 cm から出土している。上半部と右辺側を欠損している。上方の割れは古い段階のものであるが、右側の割れの一部は調査時の損傷である。表面にのみ絵画があり、板材の下端に左前肢を着け、右前肢を上げた左向きの馬を描いている。後肢部分は欠失しているが、股間には下方に垂れ下がる性器と考えられる表現があり、牡馬を描いたものである可能性が高い。

当該絵馬は輪郭線を墨で線描するが、不明瞭な部分も多い。しかしながら、この絵馬では線描部分が白っぽく浮き出ており、比較的明瞭に図像を追うことができる。これによって、上半部が欠失によって不明ではあるが、上方からのびる紐の痕跡が確認でき、装具をもつ飾り馬を描いていたことが看取できる。

なお、胸繫の下方には長楕円形の列点が表現されており、先に報告した絵馬 10 と同様に胸繫に飾りをもつものであったことがわかる。全容は不明であるが、他例と比較すると、幅 26 cm 前後、高さ 16 cm 前後を測る大型の絵馬であった可能性が高い。

すでに、記したように当該絵馬は絵馬 10 と近接して出土している上に、意匠面においても共通する点が多い。

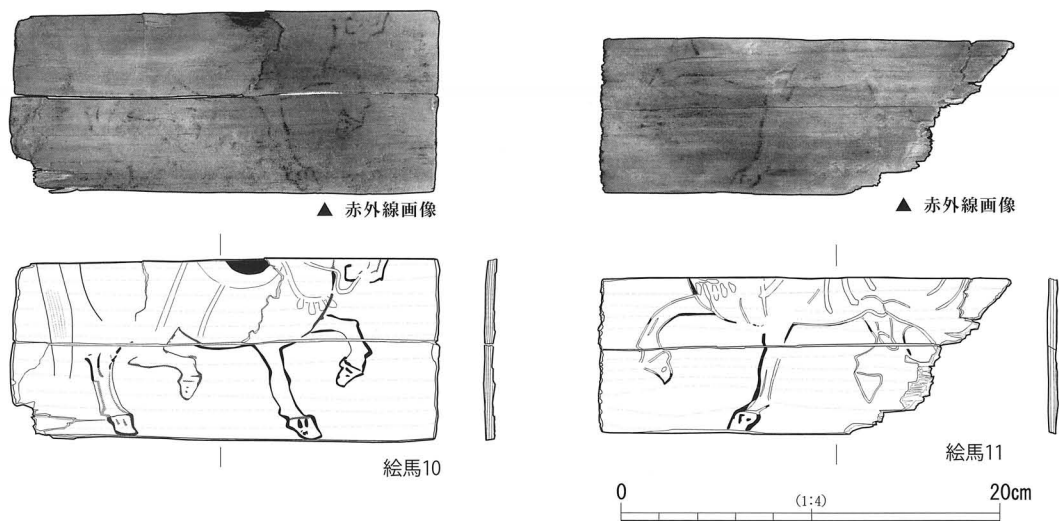


図 321 絵馬 10 と絵馬 11

4. 絵画資料にみる絵馬

難波宮跡北西部の谷から出土した絵馬の検討から、絵画意匠や法量などを同じくする絵馬が存在し、さらにセットとなる絵馬では、描かれた馬が対面する形であったことも明らかとなった。

さて、このような2枚1組の絵馬の用法については、絵巻物などの絵画資料からも垣間見ることが可能であり、諸先学の高論に導かれながら瞥見しておくことにしたい。絵画資料では、必ずしも対面する絵馬というわけではないが、2枚1組の絵馬の用法の存在が指摘されている。

『年中行事絵巻』では、神殿に2枚1組で吊るされた絵馬が描かれており、白描の画面からは馬の毛色は判別しがたいとしながらも、日乞いの白毛馬、雨乞いの黒毛馬の図を一对として奉納する風習の萌芽がこの段階に見られる可能性を示唆している（岩井 1974）。

現存する17巻は模本であるが、原本は12世紀後半、後白河法皇の勅命によって作られたものであり、当時の年中行事や風俗を知るため好資料であるとされる。この絵巻に描かれた絵馬は「長方形懸吊式板絵馬」2種で、一つは左向きの馬を描いた「二人馭者を伴う曳馬図」であり、他方は「人物三人を配したものであるが判然としない」とされる（河田 編 1974）。

また、「馬の図が九面、人物が四面、さらに動物らしきものが一面と思われる」という見解もある（岡部 1999）。

絵画資料としては最も古い段階の絵馬を描いたものとして重要な位置を占めるが、少なくとも2枚1組で懸けられた絵馬は左右対称の馬を描いたものではない。

『一遍聖絵』では、第4巻第4段と第5巻第3段に絵馬が描かれている。このうちの前者には築地の舞良戸に方形を呈する2枚の絵馬が懸かる。図柄は曳馬図とも推定されているが、判然としない。

『春日権現験記絵』は延慶2年（1309）、高階隆兼画、第8巻第5段の熱田社の社殿扉上に懸仏と並んで2枚の絵馬が描かれている。2枚の絵馬は「馭者二人を伴う神馬（黒馬）図」である（河田編 1974）。ここに描かれた絵馬は右向きと左向きの2枚1組であることが看取できるが、左側に左向きの絵馬、右側に右向きの絵馬が懸けられ、向かい合うようには配列されていない。

『慕帰絵詞』では第7巻第1段に絵馬が描かれている。観応2年（1351）完成であるが、第7巻だけは文明14年（1482）に藤原久信が描いたものである。絵馬は白馬と黒馬を描いた絵馬を1本の紐で繋いで一對にして神木に懸けられている。4セット8面の絵馬が懸けられている。いずれも左向きの裸馬を描くが、白馬と黒馬を一組とする点は興味深い。

厳密に言えば、年代を異にする絵画資料から、古代の絵馬について語ることは慎重であるべきだが、『慕帰絵詞』にみえる白馬と黒馬のセットや『春日権現験記絵』にみえる向きの異なる絵馬の描写は、諸先学が指摘してきたように重要な資料であることには変わりない。また、蛇足ながら、今回の調査で出土した絵馬のうち、絵馬2と絵馬6の上端中央には穿孔がみられるが、この穿孔は錐などの工具を用いたものではなく、長方形の形状からみて、釘を打ち込んだものではないかと想定している。

翻って、今一度、絵画資料に目を移すと、『春日権現験記絵』や『慕帰絵詞』では、絵馬が紐を用いて吊るされている状況がみて取れるが、『年中行事絵巻』には、紐の表現が見られない。

『年中行事絵巻』の絵馬は、いずれも柱に貼り付けられたように描かれており、穿った見方をすれば、これらの絵馬は紐などで懸吊されたのではなく、釘で打ち付けられていた可能性も浮上するのではないかと憶測する³⁾。

5. 向かい合う絵馬

対面する形をとる絵馬に関しては、平城京の二条大路から出土した絵馬が右向きであったことから、絵画資料や現存する絵馬の用例を遡上させて、対面する一対の絵馬の存在が示唆されていた（金子 1990・1997）。

次山 淳氏は平城宮内裏北外郭の土坑 SK820 の未報告木製品の再調査の過程で絵馬の断片を確認したのを契機として、平城宮および平城京出土の絵馬を検討している（次山 2000）。

これによると、二条大路絵馬と SK820 の絵馬の板材の幅がほぼ一致するものの、後者の馬体がひとまわり小さく描かれていることが指摘される。

また、平城宮造酒司の南面を東西に走る宮内道路の路肩に掘り込まれた土坑 SK16738 から出土した 2 枚の絵馬も対面する馬を描くものであり、二条大路絵馬と SK820 の絵馬と同様に左向きのものが右向きのものよりもひとまわり小さいことが指摘されている。

氏はさらに進めて、二条大路絵馬において陰囊が表現されていることを重視すれば、という前提で、「牡を右向きに、牝をひとまわり小さく左向きに、牝牡一対に作ることが行われていた」可能性を示唆している。

次山氏の見解は平城宮・京の限定された絵馬資料による検討ではあるが、非常に示唆的である。

本稿執筆のきっかけも次山氏の論考に触発され、難波宮跡絵馬においても同様のことが追認できるかという点に端を発している。

さて、以下では、本稿で取り上げた近親性の高い左右対称の絵馬の事例について、若干の検討を加える。

まず、絵馬 3 と絵馬 5。両者はすでに記したように絵画意匠や木取り、左右辺の成形技法、さらには法量までもが共通し、両者が同じ絵師もしくは同系の絵師によって作出されたものである可能性はきわめて高いものといえる。

しかし、この 2 枚 1 組の絵馬を見る限りにおいては、左向きの絵馬が小さく描かれることはな

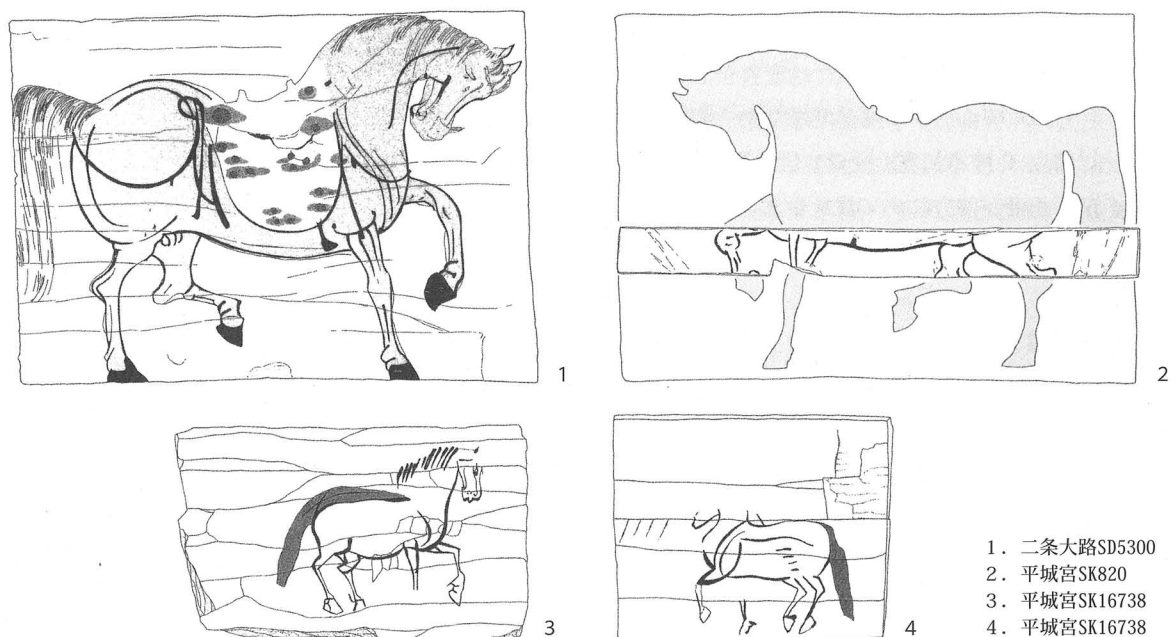


図 322 平城京出土の絵馬（次山 2000）

く、平城宮・京の場合とは異なる様相をみせる。

牝牡については、絵馬5の下半部の残りが悪く不明だが、少なくとも絵馬3の股間に陰筒・陰囊の表現はなく、これを積極的に評価する立場に立てば、この絵馬は牝馬を描いたものとなる。

また、絵馬10および絵馬11は両者ともに残存状態が必ずしもよいとはいえないが、すでに記したように絵画意匠や木取りなどから近親性が高い絵馬であると考えられる。

この絵馬では、右向きの絵馬10は不明ながらも、絵馬11は牡馬を描いたものである可能性が高い。また、絵馬10の幅は最大で22.53cmを測るのに対して、絵馬11では26cmに復元が可能であり、これを牝牡のセットであったと仮定すると、右向きの絵馬は小振りで牡馬を描き、左向きの絵馬はひとまわり大きく、牡馬を描いたものということになる。

この状況は平城宮・京の事例とは、まったくの逆相となる。

しかし、一方で大阪市所在の加美遺跡で出土した奈良時代の絵馬に目を移すと、図323に掲げた2点の絵馬は、右向きの馬が牡とされ（黒田慶一 2001）、左向きの馬は牝馬である可能性が高いとされている（豆谷浩之 1996）。

この2点の絵馬は意匠面でも共通し、牝牡の関係に関しては、平城宮・京での状況と符合する。

ただ、今回の調査で出土した難波宮跡の絵馬には、左向きの絵馬でありながら、牡馬を描いたものも確実に存在する（絵馬1）。

このほか、図324に掲げた寝屋川市所在の讃良郡条里遺跡出土の2点の絵馬は、表現がやや稚拙ながらも、いずれも左向きの牡馬を描くものである（大文セ 2004）。

また、難波宮跡絵馬のうち、最も大きい絵馬12では、左向きの馬が板材いっぱい描かれるが、陰筒や陰囊の表現はみられない。

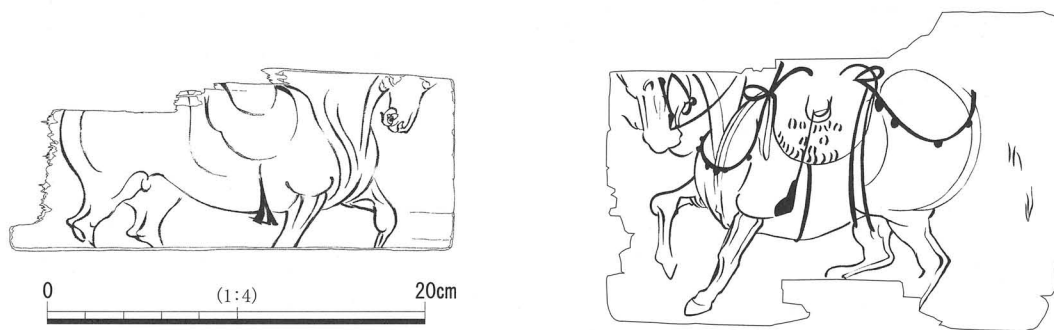


図 323 加美遺跡出土の絵馬（豆谷 1996・黒田 2001 所収図を一部改変）

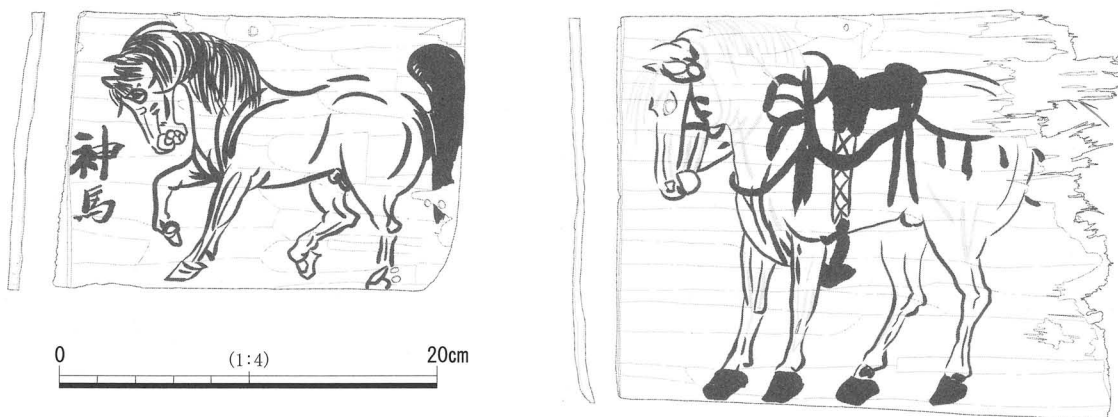


図 324 讃良郡条里遺跡出土の絵馬（大文セ 2004 所収図を一部改変）

このような状況を勘案すると、絵馬に描かれた馬の方向と牝牡の相関関係については、いまいし慎重に検討を行う必要があるといえる。

しかしながら、本稿で取り上げた一括性が高い絵馬群の中から抽出した近親性の高い絵馬の検討から、方向を異にする絵馬が2枚1組で用いられた可能性がきわめて高いことは追認することができる。

また、今回の絵馬は谷の中からの出土とはいえ、近親性の高い絵馬が近接して出土するなど、出土地点にも重要な属性であり、絵馬を出土する11層が流水性の堆積ではないことから、比較的至近から谷へと落ち込んだ可能性が高い。

このような状況を勘案すると、出土した絵馬のうち、方向が確認できる絵馬が左右ともに14点であるのは、単なる偶然として看過することはできない。

今回、抽出したような意匠を同じくする絵馬のセットは、むしろ特異な状況であり、実際にこれは難波宮跡からの出土という点からすれば、当然の帰結ともいえるが、向後の絵馬の比較検討にあたっては標式的な絵馬資料として重要な意味をもつものであるといえる。

今回の絵馬では、描かれた馬の構図がいずれも顎をひいた「側体歩」の歩様をとる、板材の下端に蹄を接する、等々が規範として守られていた可能性が高い。

このような状況は、難波宮絵馬に限定されるものではなく、全国から出土した絵馬の絵画意匠にも共通するものを見出すことができる。

しかし、この規範も空間的にいえば、当時の国家中枢である宮都から離れば離れるほど、また、時間的にいえば、宮都近辺であっても、時期が下降すればするほど、その規範が崩れる状況が看取される傾向がある。

あるいは、先に示したような一定の規範に裏打ちされた特徴をもつ絵馬に関しては、「都城型絵馬」として捉え、新たな視点で絵馬を見ることが可能であるといえよう。

註

- 1) 絵馬の年輪年代測定に関しては、奈良文化財研究所の光谷拓実氏の協力を得て行った。絵馬9および絵馬状木製品2点が計測可能であり、絵馬9は辺材型で358年分の年輪が残り、 $759 + \alpha$ 年という年代が出ている。残る2点も比較的近い年代を示している。
- 2) 「側体歩」とは「馬の歩様で、前・後肢の側面の肢を動かし、同時に着地させる」ものであり、漢代から唐代にかけての図像表現に見られる。「漢代画像石のおびただしい図象に表わされた側体歩を呈する馬は、漢の武帝によってもたらされた西方の馬というよりは、中国の在来馬、もしくは蒙古高原あたりの馬が題材になったもの」と考えられている（末崎真澄 1987）。二条大路絵馬などが「側体歩」の歩様をとることは、すでに次山氏によって指摘されている（次山 2000）。
- 3) 今回の出土絵馬を見ると、上端が残る13点のうち、穿孔を有するものが6点、穿孔を持たないものが7点を数える。すでに記したように、穿孔を有するもののうち、2点は釘などによる打ち込み痕であると考えており、穿孔の有無と状況によって、絵馬の用い方が微視的に見れば、一様では無かったことを窺わせている。穿孔にのみ注目すれば、穿孔の無い「置く絵馬」、穿孔を有するものでは、紐などで「懸吊する絵馬」、柱や扉などに「打ち付ける絵馬」が想定されることになる。

参考文献

岩井宏実 1974『絵馬』法政大学出版局

江浦 洋 2004「難波宮址北西部の発掘調査—新発見の重要考古資料—」

『シンポジウム「難波宮」,「大坂城」—上町台地に築かれた二大遺跡の最新発掘情報—』

(『「難波宮」—宮城北辺をさぐる—』発表要旨) (財)大阪府文化財センター

江浦 洋 2005「難波宮跡出土絵馬雑考」(『考古学論集』第6集)考古学を学ぶ会

(財)大阪府文化財センター 2004『讃良郡条里遺跡 (その1)』

(『(財)大阪府文化財センター調査報告書』第109集)

(財)大阪府文化財センター 2004『難波宮跡北西部の調査』

(『大阪府警察本部新築工事に伴う難波宮跡発掘調査現地説明会資料』2)

岡部昌見 1999「絵馬」『茨城県立歴史館報』26 茨城県歴史館

金子裕之 1990「絵馬と猿の絵皿—長屋王邸の調査から」

『環シナ海文化と古代日本—道とその周辺』人文書院

金子裕之 1997『平城京の精神生活』角川書店

河田 貞編 1974『絵馬』『日本の美術』第92号 至文堂

黒田慶一 2001「加美遺跡でまた、絵馬発見!」『葦火』90号 (財)大阪市文化財協会

島内洋二 2003「出土絵馬小考—讃良郡条里遺跡出土の絵馬について—」『大阪文化財研究』第23号

(財)大阪府文化財センター

次山 淳 2000「平城宮内裏北外郭出土の絵馬資料」(『奈良国立文化財研究所年報』2000- I)

奈良国立文化財研究所

豆谷浩之 1996「加美遺跡で出土した古代の絵馬」『葦火』65号 (財)大阪市文化財協会

本稿は筆者が「難波宮跡出土絵馬雑考」(江浦 2005)として発表したものを基軸として、除加筆したものである。